

1992 桜井孝身画集より

埼玉県立美術館館長 田中幸人

桜井氏の作品は見る主体と見られる対象との関係を考慮に入れたものではない。

彼の作品は画家を越えて恣意的な世界を求め、そしてそれを創造しているのである。人間の集団、鳥の羽、空を追いもとめる人、彼の抽象的なモチーフのこのような形態が桜井氏の独創的な習慣の全てを表しているのである。

そうであるにしても彼の作品によって引き出されているこの素晴らしい魅力とは、一体何なのであろうか？ それは光や闇ではなく、おそらく解脱(ニルバーナ)の幻想であり、それは現実を克服したいと願う人々の心に触れるものなのであろう。

1970年代後半、彼はモチーフ(しるし)、数字(ゼロ)もしくは(I)、記号(矢印)といった一連の作品を残している。

このシリーズのなかにある動物、全速力で駆ける狼のようなものが女性の体を突き抜けているものがある。

(ゼロ)へ向かう矢印の下に。

(無)の中に存在しようという願いは常に(エロス)の中に存在しようという欲望と戦っているのである。この戦いの矛盾が彼のエネルギーを生み出すのである。このエネルギーが彼の絵画宇宙の表現なのだろうか。

無垢で風変わりな彼の作品は苦い想いとある純真さを包み隠している。

作品は私たちに「もっと私を見て」と訴えると同時にまた「あまり遠慮がちに私を見ないで」と言っているようでもある。

今日桜井氏は彼の最新作品をその過去の軌跡を持ち続けながら私たちに見せてくれているのではないだろうか。

未来の画家のための記憶となる作品。